

私の類義語

大垣北高校 3年 吉川 結衣

似ている、と霹靂のように気づく瞬間がある。途端、綻んでしまいそうな、泣きだしたくなるような、そんな相反する感じに襲われる。

例えば、図書館の本棚で、ぴしっと並ぶ本の列に居場所を見つけかねたらしく、無造作に横たわる一冊に対してとか。

私はその一冊と、しばし向き合う。だけど、特別何か行動を起こすわけではなく、目当ての本を探して通り過ぎる。

見過ごす、とは少し違う。どちらかといえば、見守る、に近い。

「戻してあげなくていいの？」

後ろから声を掛けられた。私と全く同じ声。双子の妹の蘭だ。彼女と対面すると、鏡を見ているのかと錯覚してしまうことがある。

まだ一冊も手に取っていない私に反して、蘭はすでに数冊の本を抱えていた。

それを見て、似ていない、と思う。

「このままでいいの？」

私が答えると、蘭は不可解そうに眉をひそめた。

「私、凜の考えていることがわからない。わかるのに」

その言葉こそ意味がわからない。でも、まあ、わかる。何を考えているのか、お互いに伝わるのに、その伝わってきた内容が理解できない、という意味だろう。

私たち姉妹は、いわば類義語だった。似ているのは見た目だけだ。中身も似ているとは限らない。

そんな蘭に、私は自分の中身の説明を試みる。

「私ね、これはみ出ってしまった本のことを、自分の類義語だと思ったの」

うん、と蘭は淡くうなずく。

「自分がもしこの本だったら、この窮屈な本棚に入れられるよりは、一冊で横たわってたほうが、気が楽かなって」

蘭は私の言葉をじつくりと聞いてくれていた。あえて言葉にしなくても考えていることが伝わる私たちの間に、会話は多くない。だからこそ、わざわざ口にされたその言葉は、大きな意味を持つのだった。

「ああ。ちよつとわかったよ、凜」

私とまったく同じ目線で、私と同じ形をした瞳が、優しく細められる。それからまた少し考えるような顔になって、

「でも、私だったら、一人きりはちよつと寂しいかもしれない」

そう言って、蘭はさっきの本棚に向き直った。それだけでもう、私には、彼女が何をするつもりなのかわかってしまう。

「この本も一緒に借りちゃえばいいんだ。そうすれば、窮屈な本棚に押し込められることもないし、一人ぼっちになることもないでしょ」

私の同意を待たずに、蘭はその一冊を手に取り、抱えていた本たちの一番上に乗せた。

貸出期間が終われば、この本はまた本棚に戻ってくることになるというのに。

私たち姉妹は、やっぱり類義語に過ぎない。ひよつとすると、実は対義語なのかもしれない。

双子の妹より、図書館の一冊の本のほうが、自分に近いと感じてしまう。妹の考え方に、完全には共感できない。

次の本棚へ向かう蘭の背中が満足げで、今にも弾みだしそうだ。それを見ながら、無理に共感する必要もしてもらおう必要もないのだ、と思う。

類義語や対義語があるからこそ、一つの語の輪郭がくつきりするのだ。

それに、窮屈な列からはみ出したからといって、私は別に一人ぼつちなわけじゃない。

私はいつでも私の類義語を見つけることができる。その度に自分の輪郭を大きくしながら、私は、生きていける。